

保健物理・環境科学部会長（第3期）退任にあたり

内田滋夫（放射線医学総合研究所）

第3期の保健物理・環境科学部会長を退任するにあたって、一言ご挨拶をさせていただきます。2004年春の年会の総会において部会長に選任されてこの2年間、微力ではありましたが部会長として部会の発展のために努力してきました。小佐古敏荘部会長の後を受けて、副部会長には飯田孝夫先生（名古屋大学）、本間俊充先生（日本原子力開発機構）の体制でスタートしました。

前部会長である小佐古敏荘先生が、部会の立ち上げに続き、活動基盤の確立に全力を尽くされたため、原子力学会内部だけではなく、学会の外においても、保健物理・環境科学部会の存在が定着し始めていました。そのような状況から、部会長として、部会の活動をより活発にすることを最重要課題としてきました。2004年秋の大会では放射線工学部会と合同企画セッション「低線量放射線リスクと社会」を開催しました。2005年春の年会では、若手を中心とした部会企画セッション「保健物理・環境科学研究における若手研究者の夢」や「放射線教育」のセッションを、2005年秋の大会では、「原子力施設の環境影響評価における不確実性」を開催しました。それぞれ、重要な問題提起ができ、今後の部会活動にとっても非常に有意義な場を提供できたと思います。そして、2004年10月には、企画シンポジウム「新しい障害防止法を考える」を多くの他学協会と共同で開催することが出来ました。このシンポジウムでは、多くの参加者を得て非常に有意義な情報交換をすることができましたが、さらに、ある意味では学協会の壁を越えた交流の場を提供できたのではないかと考えています。また、関西電力（株）の宮崎振一郎氏のおかげで、ICRPへコメントを提出することが出来ました。そして、2006年には、部会員が200名を越えました。私にとっても、会員数200突破は、2004年春の年会の総会において部会長就任時の目標の一つでありましたので、任期終了直前に約束が守られたことは喜ばしいことであります。

第4期は、飯田部会長を中心として、本間俊充、占部逸正（福山大学）両副部会長とともに、新しい体制で、この保健物理・環境科学部会をさらに発展させるべく、活躍していただけるものと信じております。現在、会員200名を有しておりますが、原子力学会の中では、保健物理・環境科学部会は、まだ、それほど大きな勢力ではありませんので、今後さらに会員を増やしてゆく努力をしなければならないと思います。学会運営についても第1期から高橋知之（京大）、飯本武志（東大）両事務局担当の努力によりなされていましたが、今後、運営委員会のメンバーが分担して運営に当たるように移行してゆくことになると思います。

最後に、今以上に若い人が部会を通じて学会活動に積極的に参加してくれることを切に望みます。現在、我々を取り巻く環境は厳しい状況です。ともすれば、自分の研究や業務に没頭するだけで精一杯です。しかし、どのような学問であれ、複数の学協会の存在がその学問の発展に大きく寄与する事になると思いますので、その学協会を支える活動は重要

です。幸い、若い会員も運営委員として参加していますので、若い意見も取り入れて、ますます活動が広がってゆくものと期待しております。

この2年間、私を支えて下さった飯田孝夫および本間俊充両副部長、宮崎振一郎会計監査、高橋知之、飯本武志両事務局担当、そして運営委員の皆様には感謝申し上げます。